

毎日の積み重ねが 大きな花になると思って



the pioneer 咲く人

匠の技を伝え学び、常に新しい道を切り開く事で笑顔の花を咲かせる開拓者-Pioneer-。今と未来のTSSを開拓する人物にせまるこのコーナー。第6号は、石橋昇氏に登場してもらおう。

入社、そして加工： きっかけはいつも田又氏

農業高校を卒業後、石橋は養鶏会社に就職し新潟へ。順調に過ぎる日々が暗雲垂れ込めたのは、二十三歳の時だった。石橋の兄が地元朝日町で交通事故に遭い、帰らぬ人になったのである。突如、家を守る立場になった石橋は、地元に戻り職探しに奔走。そんな時に声をかけてきたのが、富山精研社工場長になりたての田又だった。

田又の甘い言葉に誘われて入社し、田又の『まず加工しなさい』をきっかけに加工の道へ。後の生産管理への道も、田又の『お前が図面整理やれ』が転機だった。いつもターニングポイントにいる田又に、仕事でも他の面でも大きな影響を受けた様だ。
「…田又さんだったから、私はここにいるという気はします。『叱られるうちが花や』と、何度も言い聞かされてきました。」

実践あつての学び

『これが私の最初の金言かなあ』と笑って教えてくれたのは、『元氣・やる気・勇気』。続けていけば、いつか大輪の花が咲く、その花を咲かすためにはこの三つが必要、との思いで続けてきた三十六年間の日々。自ら外注先を訪ねて得た、数多の加工技術や製作時間などの裏付けと、さらに会社との情勢や人員のスキルも加味した交渉力を基に、石橋のコンピューターが働き生まれてきた数々の“流れ”。一瞬一瞬

で変わる局面を読み、実戦を重ねる石橋の学びとは。

「時間を読めなきや見積ができない、つまり加工を知らないといけないんですよ。だから自分でも勉強してね。この仕事は経験がないと、肝心要ができない。もちろん継承してほしいけど、まず実践。身につけた上で、初めて出る。」

人間関係は仕事の要

穏やかな印象の石橋。部下を怒ったことがほとんどない背景には、性格的な面の他に意図的な面もある様だ。「人を怒るとか…性格じゃないんで。それに、部下に楽しく働いてもらうには、怒ってばっかりでも、甘いことばっかりでもダメで…。外注も社内も信頼関係が一番だと思って…私なりに気を遣ってきたつもりです。人間関係が崩れると会社も嫌になる、それが嫌だった。穏やかかっていうか…人付き合いが悪いっていうか(笑)。」

つなぎ止めるものは やりがいと家族

仕事の支えは、やりがいと家族。前者を語る姿からは、己の成長を喜びとする姿勢を、後者を語る姿からは、夫や父として家族を守る姿勢を伺うことができる。

「納期管理とか、査定内に収めたとか良い部品で上手く組めたと言われたり、トラブルなく順調に流れることが、一番やりがいにつながります。他には外注さんとの駆け引きで上手くいくと、『よっしゃ!』と。私、辛口で評判

1973年に富山精研社入社。以後、トータル・サウンド・スタック、TSSと合わせ36年間在籍。部品加工の知識は誰よりも豊富で現場からの信頼も非常に厚い。柔らかな物腰と相まって、誰にとっても良き相談相手。見た目は酒豪だが、実は下戸。「仕事上がりの一杯はお茶でしょう」

(文章 清水学さん)



石橋 昇
Noboru Ishibashi

だし(笑)。あの会社は甘いつて言われるの嫌だから。」
「学校も行かせなきやだし、ご飯も食べさせなきやだし。守るつてのは…子供の成長を見守るとか、問題ない様に守るとか。他の家より何がじゃなくて、家族で生活できればね。立派なこと言えないけど…」

最後にこんな話が聞けた。

「社長によく叱られるんですよ、私に関係ないことでも…なんでか知らんし、でも嫌とも思わんし、『はいはい』って聞いているだけです。この前なんか『経営者になるもんじゃねえ』って(笑)。察しますけどね…ここまで勤めてこられたのは、社長や同僚の方々のご指導があったからこそと、感謝の心を持ち続けたいと思っています。」

(敬称略)